

近藤

Kondo Mari

麻理

保健学研究科 准教授

今回は国際医療NGO「AMDA」での活躍でも知られる保健学研究科の近藤麻理先生にインタビューしました。



- ▼岡山県倉敷市出身。
- ▼国際医療NGO「AMDA」のスタッフとしてコソボなどへ派遣。その活躍は2009年5月『奇跡体験!アンビリバボー』（フジテレビ）など各種メディアで紹介されてきた。
- ▼2005年より保健学研究科准教授。2007年に朝日新聞紙上にて紙上特別講義『国際協力とボランティア』が3回連載。

フリーターから准教授へ

自分でも年表を書かないとわからないくらい経歴が複雑なんです（笑）。大学卒業後、ひとり旅で魅せられていたタイに渡り、4年間ほど現地で仕事をしました。

タイではお金がなくて多くの人に助けられたので、「今度には英語が必要だ」と短絡的に考えて、渡米。やはりお金がなくて、現地の大学の授業にもぐったり、タダで英語を教会などで学んだりしました。34歳になった時、タイに戻り修士課程を修了。その後は、AMDAに「どこかに派遣してください」とお願いして、ユーゴ紛争真っただ中のコソボへ行きました。

2000年からは、日本の

博士課程で学びながらタイのフィールドで調査を続け、博士号を取得。2005年に本学に助教として採用されました。41歳にしてはじめてまともな給料とボーナスをもらって、友達からは「フリーターから准教授になった」ってよくからかわれます（笑）。

コソボでの活動

コソボへは、看護の専門家ではなく復興支援のコーディネーターとして派遣してもらいました。復興の主役は、あくまでも現地の人々。私



多くの人の命を助けた

本学では、国際保健学を中心に講義しています。聞き慣れない言葉かもしれませんが、例えば、インフルエンザやHIVなどのような広域的な感染症、災害、紛

争など、一つの国では解決できない健康問題に対して、地球規模の枠組みで対処することを目指すものです。

私は「どれだけ人の命を助けられるか」を大事にしたいと考えています。昨年より、中国の武漢大学で客員教授として修士課程の学生を育てながら、実際に学生と村の中に入り、偏見と差別をなくすための活動もしています。中国ではHIV感染者が急増していますが、良い治療薬があっても、偏見や差別で治療にたどりつけないのが現実です。そこで、タイでのHIVの研究成果を、中国で応用して多くの人に役立てる。あきらめずに研究を続けて、本当に良かったと思いますね。

教養ある社会人を目指せ

一般教養科目では、「国際協力とボランティア」を担当。受講者は300人超で、本学でも受講者の多い授業なのだから。現場で活躍している人の講演、学生同士によるインタビューなど、「寝られない授業」として有名みたいです。

学生には、「20代には、社会の出来事や常識にいつも疑問をもって欲しい」と言っています。好奇心が旺盛で、常に疑問を忘れず、たくさん本を読んで勉強し、友人たちと議論して、「教養ある社会人」になつて欲しいと思います。学ぶのは自分自身なので、授業は単なるきっかけにすぎないと思っています。